

Ⅳ-15 回想分析による旧街道商店街の街路イメージの把握

○ 徳島大学大学院 学生員 亀谷一洋
徳島大学工学部 正会員 山中英生
徳島大学工学部 正会員 三宅正弘
香川県庁 正会員 前田圭美

1. はじめに

地方における小規模市町村には、街道筋沿いに商店街として発達した中心街が多く見られる。しかし、交通需要の増大にともない、この中心街を迂回するバイパス整備が多く町の中心商店街が衰退するという現象が相次いだ。つまりバイパスの目的の1つである通過交通の排除は、実際には抜け道として使われるというジレンマに陥っている。これは、わが国のバイパス整備が、旧道整備とのパッケージとして考えられることなく進められてきたことも一因であると考えられる。このため、旧街道筋住民には、旧道の利用方法や、現状についての不満も高い。

本研究は、このような旧街道商店街の再生方法を考える第一のステップとして、道路の再生コンセプトの抽出を行うことを目的としている。このため、徳島県の羽ノ浦町商店街を事例として、この旧街道商店街に焦点を当て、回想分析法をもちいて、沿道住民が持つ旧街道商店街の街路イメージの分析をおこなった。

2. 羽ノ浦町商店街の現状

羽ノ浦町は、徳島県の南部に位置し、県都徳島市から南に約 15 km の距離にある、面積 8.9km²、人口約 12,000 人の町である。地形的には山林が少なく、平野部に田園景観の広がる町である。昭和 46 年に徳島県東部都市計画区域の指定をうけており、およそ 1.5m²（町域の 16.9%）が市街化区域に指定されている。

その中であって、羽ノ浦町商店街は、羽ノ浦町の中心部に位置する延長約 800m、幅員 6～10m の旧国道沿いに発展した路線型商店街である。

羽ノ浦町商店街は、古くは土佐街道として、徳島県と高知県を結ぶ幹線街道上にあり、また、J R 羽ノ浦駅への進入路と交差することもあり、農産物の集散場所として栄えてきた。

昭和の初期には、この街路に沿って一部は道路の両側に、用水が流れており、用水の幅は 2m～3m、道路と用水で現在の幅員であった。昭和 7 年頃から順次用水に蓋がかけられはじめ、昭和 27 年頃からの蓋がけ工事で商店街部分は全線蓋がかけられた。道路の形状としては、この用水の蓋がけ工事で完成形状となった。

昭和 44 年に商店街を迂回する形で国道バイパスが完成し、この旧街道は県道となり現在に至っている。

3. 回想分析による沿道住民へのヒアリング

本研究では、羽ノ浦町商店街沿道住民に回想分析を実施した。回想分析とは、臨床心理で用いられる重要事項分析の手法を道のイメージ抽出に応用したもので、今までの日々の生活において、前の道路で思い出す楽しかった（よい）イメージ、わるいイメージを語らせ、その要素と連関を分析する方法である。

被験者は、住民 6 名を対象で、50 代から 80 代の男性 5 名、女性



図－1 羽ノ浦町商店街平面図



図－2 羽ノ浦町商店街の現況

1 名である。今回は、被験者の年齢属性に偏りがあるが、過去の道路に関するイメージを思い出してもらうため、地域に住んでいる期間の長い年輩の人の意見をきくことが重要と判断した。

ヒアリングの手順を以下に記す。

- 1）被験者に家の前の道で思い出す、よいイメージ、わるいイメージを何でも自由に話してもらい、テープに録音をする。
- 2）テープ録音をもとに、被験者の供述を時間軸上に書き写す。
- ヒアリングは、平成 13 年 11 月に数回に分けて行った。

4. 回想分析の結果と考察

次に項目の内容を分解し、D.N.Hinkel によって開発されたラダーリング技法¹⁾を参考に次の方法でイメージラダーを作成した。

たとえば、「夏祭りに人がたくさん来てくれて楽しかった」という発言は、発言を「夏祭り」、「人がたくさん来てくれた」、「楽しかった」に分ける。

そして全体の概念である「夏祭り」を上位項目に、具体像としての「人がたくさん来てくれた」を下位項目として配置し、「楽しかった」はよいイメージに分類する。

作成結果を図－3に示す。これから、以下のことがわかる。

- ① 6 名全員が用水についての発言と、自動車や歩行者など交通についての発言をしていることがわかる。夏祭りなどのイベントと日常生活上で感じるにぎわいや地域のコミュニティを指摘した人は 4 名となっている。景観についての発言は 2 名であった。
- ② 時代の変遷により、被験者のもつ道路に対するイメージが交通に関する項目に移行していることがわかる。これに対して、イベントやにぎわいは、昭和初期から戦後まもなくまでは項目として多くあげられてきたが、昭和 44 年のバイパス開通後からは、項目としてあがらなくなり、商店街としての活力の衰退が感じられる。
- ③ 以前に道路に平行して流れていた用水については、危険だったというイメージと、用水を利用し、自然を感じたり、楽しんだという、両方のイメージを持っている。用水に蓋がかかって、用水に落ちる危険はなくなったが、自動車や自転車が家の際までくようになり、危険になったと感じる人もいた。
- ④ 被験者は、景観やイベント、にぎわいといったソフトな部分に対するわるいイメージはないが、用水や交通に関しては、よいイメージとわるいイメージの両方を持っていて、被験者の評価が分かれている。これは、今日の道路の新設、改良に対する地権者の意見の多様性に相通じるところがある。

5. おわりに

今回、回想分析法を使うことによって沿線住民の道路に対して持っているイメージを抽出することができた。今後、年齢層や性別の違う沿線住民を対象にヒアリングをおこなっていきたい。

上位概念	発 言 内 容				
	景観 (2)	用水 (6)	イベント (4)	にぎわい (4)	交通 (6)
時代 変遷	昭和初期 見晴らしたが よかった (2) 農りに雑物が なかった (1) 川へ降りる階段が あった (1) 家への出入は不便 だった。 (1) 家への出入りは 木造船の板の使い古し をつかった (1)	△危険 (3) △人がよく落ち ていた (3) 水がきれいだった (2) 雲が飛んでいた (1) 那賀川の水を引き込 んでいる (2) 魚がいた (1) 泳いでいた (2) 泳いで競争をした (1) 石垣の水路だった (1) 魚がいた (1) いろいろな生物が いた (1)	夏祭り (4) 人がたくさん 来てくれた (3) 山車がでて いた (2) 提灯が並んで いた (2) 香丁車位で参 加した (1) 花火があった (2) 提灯が並ん でいた (1) 各家を見て 回った (1)	馬と車と自転車 通っていた (2) 農作物の集散地である 駅への玄関口である (2) 一両車で通んでいた (1) 大八車で通んでいた (1) 餅 (縁台) の思い出 (1) 夕方に近くの人々が集まっ てきた (1) 世間話をしていた (1) 縁台将棋をしていた (1) 夜に風呂からでて通ん でいた (1) 製材屋で働いている人達がよ く来てくれた (1) カフェがあった (1) 通行人が多かった (1)	大型の製材運搬車が 通っていた (1) バスが通っていた (1) 家の前がバス停 だった (1) 用水に蓋がかかった (4) 道路が広く なった (4) △家への出入りが危 なくなかった (1) △自動車が家の前 を通る (1) △自転車が家の 前を通る (1) △危ない (4) △交通量が多 い (4) △道路の向こう側 へ渡れない (1)
	昭和 20 年頃				
	昭和 40 年頃	向かいの雑物が 移転した (1)			
	バイパス開通				
現代	注) 図中の にぎわい については、筆者がkeywordとしていた。 図中の △は、わるいイメージを表す。 図中の () 内の数字は発言者の数を示す。				

図－3 回想分析によるイメージラダーの結果

参考文献 1) 讃井純一郎, 乾正雄: レパーリー・グリッド発展手法による住環境評価構造の抽出、日本建築学会計画系論文集第 367 号、PP15-21、昭和 61 年 9 月